

Enhavo	1
皆で語ろうエスペラント..... 笈 邦麿 ..	2
藤本達生のエス文法教室..... 藤本達生 ..	5
海外特派員ページ	バルバラ・ピエトシャック .. 10
海外特派員ページ	オルガ・グリボヴァン .. 18
通信添削講座模範解答	碓 大福 .. 21
通信添削問題	23
藤本達生の続きもので読みもので	藤本達生 .. 24
お知らせ・エスペラント日本語辞典発刊予定.....	28
Lasu al mi ion diri	29
EPA事務局便り	30

2006年5月 新規・継続会員

継続

Multan dankon kaj
bonan kunlaboron!

特別賛助会員：永沼久枝（千葉）

普通賛助会員：中村文昭（埼玉）

普通会員：東かおり、藤原芳枝、宇佐美賢治、宗田敏子（大阪）、栄光友の会、浦野桓一郎、桜園春部、中島操子（奈良）、有馬正子（鹿児島）、清水聖浩、高橋政明（愛知）、森真吾、牟田哲也（福岡）、近藤聡、竹本紋代、天野照子（京都）、上地悦子（滋賀）、都賀本明子、網澤幹子、田中久美子（鳥取）、小林昭彦（新潟）、三ツ野眞三郎（石川）、水戸王美、大槻秀敏（宮城）、岩崎一郎（岡山）、木島宏美（栃木）

家族会員：宇佐美日出子（大阪）、網澤幹樹、網澤松子（鳥取）

購読：清水孝一（埼玉）

.....
●
● 表紙の解説（Klarigo pri kovrila bildo） ●
● 出口 瑞（DEGUĈI Micugi） ●
● 「瑞鳥文断片」“Fragmento de grua desegno” ●
●
.....

皆で語ろうエスperant

新しい道を希望と共に歩もう

EPA 講師

筧 邦磨 (かけひ く に まろ)



1954年(昭和29年)、私が中学3年生のときはなしである。

国語の時間に、担任の山根先生(剣道の高段者でもある先生は、今も80歳をすぎて、日々、元気で農作業にはげんでおられる。)が、「きみたちは、これからの日本を背負ってたつ前途洋々の若者だから、この詩を覚えておくといい。」と言いながら、高村光太郎の詩「道程」を黒板に書かれた。

私たち生徒は、それをノートに書き写したのだが、その冒頭の

僕の前に道はない
僕の後ろに道はできる

という二行が、私の心に深く刻みこまれたのである。

それから時は流れて1964年(昭和39年)2月、私は当時、大本本部宣教部青年課に在籍していた。課長が三諸(出口)斎氏、主事が小林泰氏で、それに私と青年課はわずか3名の小さな所帯であった。

ちょうど青年会が青年部へと、組織が大きく変る歴史の曲り角であった。

前年(1963年)は、ちょうど大本エスperant運動40周年記念の年で、エスperant広場に記念碑が建ち、京太郎先生と梅田善美氏が、大本青年を代表して、第48回世界エスperant大会(ブル

皆で語ろうエスペラント

ガリアのソフィア)に参加され、欧米14ヶ国57都市を110日間をかけて親善旅行をされ、当時の「愛善苑」誌には、毎号、両氏の報告記事が大きく掲載されており、天恩郷は一種のエスペラント・ブームで熱気があふれていた。

そこで、これからの大本青年は、大いにエスペラントを学ばねばならぬという高揚した雰囲気の中で、エスペラントの学習機関誌を月刊で発行しようということになり、まずは題名を決めようということで、3人がいくつかの案をもちよることになった。

当時、私は亀岡市篠町王子に住んでいたが、本部へ出勤する自転車の上で、フッと高村光太郎の詩の一節を思い出し、そうだ、新しい道というのはどうかと、Nova Vojoという題名がひらめいたのである。

さいわい、検討会議の結果、それでいこうということになり、本部長決裁を得たのち、私はさっそく虎雄先生宅を訪問、画室で墨痕あざやかにNova Vojoと和紙にしたためていただき、天声社工場に凸版にしてもらうよう持参したことを記憶している。

まさか、15歳のときに感動した詩の一節が、10年以上たって機関誌の題名に定着するとは、夢のようなはなしではある。

そして、数年後には、尊師様が、色紙にNova Vojoと揮毫されたことを知り、私は感動を新たにしたのである。

リアルタイムの新しい時代

創刊号が第3号までは謄写印刷であった本誌も、4号からは活版印刷となり、今日のような機関誌のように成長発展し、ごく最近では海外特派員制度も確立し、まさに42年前のことを思えば、夢のような気がする。

皆で語ろうエスペラント

私は、最近の本誌を手にして、つくづく時代の変化と、科学技術の急速な進歩ということを感じする。

インターネットの時代になって、世界各地から送られてくる原稿やさまざまな情報が、すぐに(文字通り、たちどころに)編集者の手もとに届き、しかも卓上パソコンのおどろくべき多彩な性能によって、レイアウトなどの作業が簡単かつスマートに処理できる時代となり、私は、時代おくれとって笑われるかもしれないが、まるで浦島太郎のような心境を味わっている。

とくに先月号に掲載されたバルバラ女史とリンス博士の対談記事(ポーランド放送の録音を文章に再現したもの)などは、ご兩人ともエスペラントを母国語以上に自由にあやつる世界最高レベルの達人なので、この記事一篇をじっくり読むだけでも、生きた現代エスペラントの表現を学ぶ絶好のテキストであり、教科書1冊分の値うちが充分にある。

エスペラント運動とは、世界語エスペラントを全ての人類の共通財産にするための平和運動である。

現在、約1千万人といわれるエスペランチストの数が、はやく1億人の大台に達し、さらに政治、経済、文化、社会のあらゆる日常生活のなかで実用される日が一日もはやく来るように、われわれは各自新しい道を切り拓いて前進をつづけたいと思う。

(2006年6月12日 日本エスペラント運動100周年の日に記す)

(写真右)

エスペラント運動史研究の世界的権威 ウルリッヒ・リンス博士と筆者

於：第88回日本エスペラント大会2001年10月 宝塚



藤本達生のエス文法教室

講師 藤本達生

4月号から始まりました「いわゆる16カ条の文法について」と「本来副詞の使い方について」の掲載を続けるつもりにしていたのですが、今秋10月初旬を目標に、これらをまとめた単行本を出す計画が進行中なので、いったん、打ち切りとさせていただきます。

「これら」とは上記の他に、接続詞、接頭辞、接尾辞、前置詞、形容詞、副詞、動詞、前置詞の接頭辞用法、分詞、作文入門、会話入門、会話の文例、文型のいろいろ、発音の仕方、本の読み方などを含みます。

6月7日には印刷所に原稿を入れました。

そこで、10月には本になるものをずっと連載するのかもしれない、これまで出たものをもって打ち切りとさせていただきます。このことを皆さまにお詫び致しますとともに、発展的解消とご理解いただければありがたく存じます。

さて、今回は7月号だけの読みきりで書かせていただきます。

「ごちそうさまでした」

EPAには時々、「ごちそうさまでした」をエスペラントでどう言うのか、という問い合わせがありますが、こうするのは実にむずかしいのです。なぜなら、SalutonとかBonan tagonのように、お馴染みの挨拶とは違い、エスペラントでは普通言わない表現だからです。もし英語であればいかなる場合も、「英語ではそういうことは言いません」と言えば済むことです。

しかし、エスペラントは違います。将来は「世界語」にもなるのかという希望を秘めた言葉なのですから、「エスペラントではそういうことは言いません」と切り捨ててしまうわけにはいかないという事情があります。

さて、言葉というものは、とくに翻訳というものは、「当たらずといえども遠からず」ぐらいに考えておかないと難しすぎるものです。時にはピッタリという表現もありますが、そうでない場合も大目に見てやる必要があります。

藤本達生のエス文法教室

さて、以上のような言い訳をした上で、何とお答えしたかに移ります。

Koran dankon por la regalo.

がそれです。ここで知っておくべきことは、日本語では「確認する」のが主な役割だということです。ごちそうさま「でした」と、ごちそうであったことを確認はしているが、何も「ありがとう」とは言っていない。

日本語になるべく忠実にとなれば、おそらく、

Estis bona regalo. でしょうか。

regalo は「もてなし」で「ごちそう」に通じる。pro とせず、por としたのは「～のために」「～に対して」と目的を示すから。pro は、「～のゆえに」「～が原因で」ということ。pro でも理論的にはかまわないが、心情的にはporでしょう。laは言う方も言われる方も知っている regalo であるから。

「いただきます」

では、いただきます、はどうしたらいいかということになります。エスペラントでは、食前にはお互いに相手に対して、

Bonan apetiton.

と言います。意味は「良き食欲を たんと召し上がれ」ということ。

それに対して、「いただきます」は、神様いただきます、という意味もあるにしても、まずはわが身に「いただく」といっている。その意味からすれば、

Bonan apetiton al mi.

というのが、応用できそうに思われる。日本語では食欲のことなどは言っていない、これでは不満である、そうお考えの方も多いかと思われる。では、

Danke mi prenos la manĝon.

はどうであろうか。「ありがたく食事をいただきます」ということだから。

藤本達生のエス文法教室

「行って来ます」

文字どおりには、

Irinte mi (re)venos.

であろうが、これでは、あいさつというより説明くさくなります。

ここはあっさり、ĝis revido. にならい、

Ĝis reveno.

でいいかも知れない。Mi iros. でも通じるけれども。考えてみれば、この ĝis reveno. という表現にはお目にかかったことがない。

案外、いけるかもしれない。

「ただいま」

意味から言えば、Ĝuste nun. であろうが、別の表現も考えられる。

Mi jenas.

はどうだろう。Jen は、Jena、jene、jeno などと使われるが、jeni はあまり見ない。「私はここだよ」ということで、「ただいま」に通じるように思われる。

「ごくろうさまでした」

これは、やや目上の方が目下の人に言うのが本来の姿であろうから、それを加味すれば、

Mi aprecas vian klopodon.

Mi ŝatas vian kunlaboron.

といったところであろうか。

「おつかれさまでした」

実際には「おつかれさま！」「おつかれ！」(芸能人など)として使われることが多いと思われる。「お」は「あなた」の意味であろう。つまり、「あなたはつかれました」という確認なのである。意味からは Vi certe laciĝis. だが、これでは、いたわったことにならない。

藤本達生のエス文法教室

Konsolon al via ĝislaciĝo.

これでいけるかも。konsolo とは「なぐさめ」であるから。「疲れる」は laciĝo でいいが、ĝis (まで) がつくことによって、「おつかれ」により近くなるのではないか。

「お気をつけて」

広い意味では、

Zorgu vin mem.

ご自身で気配りを！と言う。

道路で、石ころや車に「気をつけて」は、

Atenton !

でよるしい。ご注意を！である。

「すみません」

何か悪いことをして、ごめんなさい、とあやまる時は、

Pardonu min.

Mi petas vian pardonon.

などだが、日本語の「すみません」は、何か頼む時にも使われる。

Mi petas.

または

Bonvolu.

時には

Mi bedaŭras.

のこともあるはず。

「お気の毒に思います」の意である。

たとえば、満員電車の人混みの中を前に進んで行く時などには、これからすることを許して下さい、というつもりで

Permesu (min), permesu (min).

藤本達生のエス文法教室

と言いながら行く。

「残念ながら」

これは、日本的表現ではないけれど、便利な言葉なのでここに出しておきます。何か頼まれたりした時、ダメなら、

Bedaŭrinde, mi ne povas akcepti tion.

「残念ながら、それはお引き受けできません。」として使える。

「お気の毒ですが」

相手を気の毒に思う時は、そのまま、

Mi bedaŭras vin. と言う。

「ご遠慮なさらずに」

これは、

Ni ĝenu vin, mi petas.

と言う。ĝeni とは、精神的または物質的に相手の行動の自由を奪うこと。遠慮すればモジモジとする。これはsin ĝeni している姿である。

「平然としている」

Li agas ĉiam kaj ĉie kun aplombo.

「彼は常にどこにいても平然として行動する」。こういう人もたまには日本人の中にもいる。国際的な場所に出れば、モジモジしているよりは、まだ、平然としている方がよい。あるいは、日本式に言えば、「平常心を保つ方がよろしい」ということになろうか。

Okinavo

Barbara Pietrzak

Kiam la 5-an de februaro en la interreto aperis la informo, ke la pola rokkantisto Tomek Mazowiecki kaj Miyazawa Kazufumi komune surbendigos dum la nunjara somero la kanzonon de la Insulo "Ŝimauta", mi jam estis en Japanio sciante, ke mi verŝajne vizitos ankaŭ Okinavon. Sed mi tiam tute ne sciis, ke tiu ĉi kanzono post mia reveno, memorigos al mi la viziton en la paradize alloga, sed ja samtempe forte damaĝita loko en Japanio, la unusola loko en la lando de la burĝonanta ĉerizujo, en kiu okazis la rektaj interbataloj de japanoj kaj usonanoj dum la lasta mondmilito. Se ĉies kompaton elvokas la terura sorto, kiun spertis Japanio – pro la faligo de du atombomboj sur Hiroŝimo kaj Nagasako – ĉu eblas paroli pri la kompatato rilate al batalo en Okinavo, kiu estis unu el la lastaj bataloj de la 2-a mondmilito, kies teruraĵoj lasis longe ne cikatriĝintajn vundojn de suferoj kaj damaĝoj en Eŭropo, en mia propra hejmlando? Sed mi sciis, direktiĝante al Okinavo, ke tiu vizito – post la pli frua en Hiroŝimo - multe gravos por mi – ankaŭ, por ke mi povu pli bone kompreni Japanion. Kun aparta antaŭemocio mi pensis pri ĝia efektivigo.

Fin-fine pli ol duhora flugo, sub la helblua ĉielo orumita per la sunradioj, kondukis min kun YANO Hiromi - flanke de Oomoto - la 13-an de februaro el la flughaveno Kansajo en Osako al Okinavo. Nur lastmomente proksimiĝante al la surgrundiĝo mi rimarkas la konturiĝantan bordolinion de la insulo kaj la smeraldobluon de la maro. Okinavo – eta insulo sude de la japana insularo - ĉiam vekis ĉe mi la asociaciojn pri la venka 2-a mondmilito, sed tutcerte - malgraŭ viditaj pli frue fotoj - mi ne imagis ĝian paradizan ĉarmon. Nun mi vere ĝuas ĝin meze de la plej frosta monato en la fora Pollando. Sed ne lasas min aparta sento, ke ne la ĉarmo kaj vidindaĵoj de Okinavo estas la ĉefcelo de mia vizito. Jen kaj jen, revenas la truda demando: kio vere okazis tie dum la lastaj tagoj de tiu ĉi

沖縄

バルバラ・ピエトシャック（ポーランド）

（2004年）2月5日にインターネットで宮沢和史がポーランドのロック歌手トメク・マゾウィエツキと一緒に「島唄」を歌って、今年の夏にCDを出すと報じられたとき、私はちょうど日本にいて、沖縄を訪ねる予定でした。

でも、そのときには、帰国後その唄を聴いて、天国のように魅力あふれる土地であり、同時に日本の深い傷跡を残しているところ、日本で最初に桜がほころびはじめるところであり、世界大戦で日米が直接交戦した場所を訪ねたことを思い出すことになろうとは、思いもせませんでした。

もし日本が経験した大変な運命 広島と長崎に原爆が投下されたこと が、あらゆる人の同情をひきおこすなら、第二次世界大戦の最後の戦いの一つである沖縄戦に対する同情について話すことはできるでしょうか？この恐るべき大戦は私の故郷、ヨーロッパに苦しみと損害という長いあいだ癒すことの出来ない傷を残しました。

でも私は、沖縄に向かうときに、広島を訪れた後のこの訪問が、日本を良く理解するためにとても大切だと気付きました。私はわくわくしながら、その地を訪ねることから、どんな影響を受けることになるのだろうかと考えました。

2月13日、二時間あまりの飛行で関西空港から、太陽の光輝く水色の空の下沖縄へと、大本の矢野裕巳さんにご案内いただいてやって来ました。

着陸する直前になって、エメラルドブルーの海と島との境界が、やっとはっきり見分けることができました。沖縄は日本列島の南の小さな島で、私はいつも第二次世界大戦に関連して思い出していましたので、以前に写真を見たことはありましたが、天国のように美しいところだとは想像もしていませんでした。

凍て付く2月中旬のポーランドに帰って、私は今その美しい自然を本当に楽しんでます。

でもその一方、私の訪問の主な目的は沖縄の魅力と名所ではないことが頭から離れませんでした。世界大戦の終りの数日に、ここで

mondmilito, dum kiuj pereis tiom da homoj? Ĉu respondos ĝin la vizito en Muzeo de Paco sur Okinavo, kiun ni celas preterveturante la vaste etendiĝantan terenon de la usona garnizono sur la insulo? La vetero enorme belas, por mi preskaŭ someras, kiam ni atingas la bordon, ĉe kiu la 1-an de aprilo de la 1945-a komenciĝis la invado de la usonaj trupoj kaj la japanaj-usonaj interbataloj. La nigraj granitaj tabuloj kun dense surskribitaj nomoj atestas hodiaŭ mute pri tio, kio tie okazis, atestas pri la vivofero de cent kelkdek mil japanoj – en prema plimulto loĝantoj de Okinavo - kaj 12 mil usonanoj. Mi ne povas legi la plej multon de la nomoj, sed ili impresas min kiel senfinaj vortoj de litanio. Ĉies nomo vekas la imagon pri konkreta homo, kiu batalis jen pensante pri la fino de tiu ĉi terura milito, jen konvinkite ke ne eblas kapitulaci. Tion, kio efektive okazis tie ĝis la 23-a de junio - kiam kapitulacas la lastaj japanaj trupoj – rekreas en la brile blankaj konstruaĵoj - la Pacmuzeo, kies pavilonoj ne tuj malkaŝas la enhavon. Frapas min la bildo de la mizero de la batalantaj kaj rezistantaj japanoj kaj ilia organiziĝo, frapas la atestoj de sufero kaj rezisto. Preskaŭ ĉiu eksponaĵo devigas halti momenton kaj mediti. Hodiaŭ ĉio ĉi ŝajnas rekte nereala, kiam mi rigardas de sur la eskarpo la vastan maron, ĝuas la sunvarmon kaj delikatan ventoblovon. Ni ne solas. Inter tiuj, kiuj kiel ni medite vizitas la lokon ne estas sole japanoj. Silente kaj koncentrite ni finfine forlasas ĝin, la unusolan batallokon en Japanio.

Tamen ne por longe ni distanciĝas disde la militaj rememoroj. Jen laŭvoje ni denove haltas. Ĉi-foje ni eniras bunkron-fortreson, en kiu pereis per la sinmortiga morto 4 mil soldatoj kun subadmiralo Minoru Ota kaj lia stabo. Ni eniras tiun veran labirinton kaj sekvas itineron – tiom ampleksan, ke ni povas iri laŭ ĝi nur fragmente. Ĝi tamen helpas imagi la trapason de la rezisto, la vivon de tiom da viroj en la militkondiĉoj. La febro trakuras mian haŭton, kiam ni ektroviĝas en la kamero, iama stabejo – sur kies muroj ĝis hodiaŭ kvazaŭ freŝspure videbliĝas postkuglaj truoj kaj sangostrioj. Kiel kompreni tiun ĉi decidon, kiu ordonas al tiom da viroj adiaŭi

いったい何が起き、かくも多くの人が亡くなったのか、という問いが去来します。その答えは沖縄平和資料館で見つかるのだろうか。私たちは島内にある広い米軍基地の横を通過して資料館を訪ねました。

1945年4月1日に米軍が上陸を開始し、日米が交戦した海岸にたどり着いたとき、お天気は素晴らしく美しく、私にとってはまさに夏でした。沈黙したままの黒みかげ石の石碑には名前が刻まれ、そこで起きたことを証言しています。10数万の日本人が命を捧げたこと、そのほとんどは沖縄の住民で、そして12,000人の米兵が命を捧げたことを証言しています。

私はほとんど名前を読めませんでした。果てしない連禱の言葉のようだとは思いました。降伏はできないという覚悟で、凄まじい戦争が終ることを願って戦った人々の姿を、すべての名前を見ながら思い浮かべました。

平和資料館の白く輝く建物の中では、最後の日本軍が降伏した6月23日まで、そこで起きたことを再現しています。展示を一見しただけでは、何を訴えているのかが直ぐには判りません。戦っていた日本人のみじめな姿を描いた絵に私は衝撃を受けました。苦悩と抗戦の証言に衝撃を受けました。ほとんどの展示の前で足が止まり、考えさせられました。温かい陽の光を浴びて優しいそよ風に吹かれながら、広がる海を防塁の上から眺めていると、これらのすべてがほんとに起きたとは思えませんでした。

私たちの他にも人はいました。感慨深く見て回っているのは、日本人だけではありませんでした。静かに思いを込めて、日本の唯一の戦場だったところから、私たちはそっと立ち去りました。

でもすぐに戦争の記憶に立ち戻りました。予定通り、私たちは再び足を留めて、太田実海軍少将と4,000の将兵が自決した塹壕を訪ねました。それは迷路になっている上に広いので私たちは一部しか見られません。でも、戦時下で多くの将兵が暮らしていた様子が想像できました。参謀本部だった部屋の壁に弾丸の穴と血痕が生々しく残っているようすに、鳥肌が立ちました。多くの将兵に自決を命じたこの決定を、どう理解すべきでしょうか？

私は案内者の矢野裕巳さんと、捕虜になるよりは自決することを

la vivon? Ni komencas interparoli kun mia amika ĉiĉerono, YANO Hiromi pri la iama japana eduksistemo, kies honorpunkto estis prefere morti ol kapitulaci. El la mallumo de la subterejo ni eniras la sunplenan, printempan tagon. Tiom da vivoferoj, tiom da ŝajne vanaj vivoferoj!

Sed tuj baldaŭ ankoraŭ unu halto. Himejuri. Batalkampa hospitalo, en kiu la suicidan morton elektis flegistinoj, mobilizitaj knabinoj el la knabinaj altlernejoj. Ni rigardas iliajn portretojn, spirdetene mi admiras ilian belecon kaj legas informojn pri ilia kortuŝe juna aĝo, en kiu ili elektis morton. Mi foliumas iliajn multobligitajn leterojn, Hiromi jen kaj jen haltas por legi pli detale. Mi sentas senpovon, pensante pri ilia eduko kaj fideleco al la edukideoj, tiom malsamaj ol tiuj, kiuj gvidis polajn gejunulojn dum la milito, kaj kiuj ordonis batali ĝis la lasta vivoŝanco kaj nur en la batalo oferi la vivon por la patrolando.

La sunplena, printempa, mirinda Okinavo, kun la vastaj kanokampoj, bluaj kaj bluverdaj marakvoj levas antaŭ mi sian sekretvualon. Nun la insulo pulsas per la vivo – sed kiom da tiuj, kiuj svarmas vespere en la homamaso pensas pri la pasinteco?

Sed ankaŭ ĉi tie ne mankas lokoj kvazaŭ foraj de la civilizacio, kie kampojn oni kultivas per serpo enmane. La sekvan tagon survoje al la nordo de la insulo mi gapas al la eta bieno, kiun kultivas for de la urbocentroj kamparano en modesta laborvesto kaj karakteriza pajloĉapelo. Li peze rektiĝas por ekzameni – ŝajnas al mi, ke ne oftan ĉi-loke – aŭtomobilon bruon – sed mi ŝtoniĝas sub lia rigardo kaj komprenas, ke mia haŭtkoloro perfidas min. Ĉu li flegas la memoron pri la invadintoj?... Tuj proksime al lia kampo ni malsupreniras groton, kun la memortabulo kaj vasta nigra buŝo de la enirejo neniel invita. Ĉiribigama! Tie ĉi kaŝiĝis 140 loĝantoj de la vilaĝo – 83 sinmortiĝis. Revene trudiĝas la demando pri la senco de tiu vivofero kaj kapklino antaŭ la decidoj kulture malsamaj, home solidaraj.

重んじたという日本の教育システムについて話しました。地下の暗闇から、太陽がいっぱいの春の日に出ました。多くの命が散りました、いたずらに多くの命が散ったと思えます。

すぐもう一つの場所に立ち寄りました。野戦病院のひめゆりです。女学校の生徒が看護婦として動員され、自決を選びました。遺影を見れば、息を飲むほど美しい人たちで、資料を読むと、若くして自決を選んだことに心を揺すぶられました。私は複写された手紙をめくりました。矢野さんが立ち止まっては詳しく読んで下さいました。彼等が受けた教育について考え、教育理念に対する誠意について思いを馳せ、私は無力を感じていました。祖国のための戦いに命を捧げ、命の終わりまで戦うことを命じた戦時中のポーランド青年に対する教育と、何と違うことでしょうか。

太陽がいっぱいの素敵な春の沖縄、広いさとうきび畑、青と緑の海が私の目の前で秘密のベールを脱ぎました。今では島に命が脈打っています。でも夕方に群がる人々のうちの何人が過去に思いを馳せるでしょうか。

しかし、ここは、人々が鎌を手に農業をする、文明から遠く離れた土地でもあります。

次の日、島の北部に行く途中で、私は小さな農地に見入りました。そこでは麦わら帽子をかぶった粗末な野良着の農家の人が土を耕していました。彼は苦しそうに上体を起こしました。ここでは自動車の音は珍しいのだろうかと思いました。

私の肌の色から私が欧米人と判ったのだと、私は彼の視線に身を固くしました。彼は侵略者のことを思い出しているのでしょうか？

その農地のすぐ近くのほら穴に私たちは下りていきました。記念碑が立つ黒い広い入り口は私たちを全く歓迎していませんでした。

チリビガマ、そこで140人の村びとが身を隠し、そのうち83人が自決しました。命を捧げる意味があったのか、人々が心をついに決定に従うという異文化に対する疑問が再び戻って来ました。

チリビガマ、有名な小さな島の中でも、地図から消え去ったような場所。でも、永遠にほら穴に留まるみ魂にお参りされる方が私た

Ĉiribigama, loko ŝajne perdita ankaŭ sur la mapo de eĉ tiu eta insulo kun fama nomo. Sed ne, jam venas aliaj vizitantoj por omaĝi la memoron de tiuj, kiuj poreterne restis en la groto. Denove konsternas min la kontrasto inter la morenda loko kaj la beleco de naturo, kiun mi klopodas parkerigi por ĉiam. La verdon de la plantoj, kanokampojn, la burĝonantajn florojn, sunradiojn, homojn samajn kaj malsamajn ol sur aliaj japanaj insuloj.

Ĉu mia vizito en Oomoto-Centro en Kameoka kaj Ajabe – kiu ebligis al mi konatiĝi ankaŭ kun tiu ĉi faceto de la japana historio estas nur hazarda kaj koincida? Ne, evidente ĝi kaŝas, sed ja ankaŭ malkaŝas pli profundan sencon. La konatajn ĝis nun historiajn eventojn mi alrigardas kvazaŭ de inversa flanko, kvazaŭ laŭ rigardo de tiuj, kiuj same kiel ni home suferis. Ĉio ĉi okazas en la 2004-a jaro, jaro por mi aparta, la jaro de la datrevenoj – jen la 60-jariĝo de la albordiĝo de la aliancanoj en Normandio, jen la 60-a datreveno de la Varsovia Insurekcio – en kiu kontraŭ la germanan invadinton batalis grandparte polaj infanoj, skoltoj, oferante sian junan vivon por liberigi la patrolandon. La 2004-a jaro, la jaro por mi aparta – dum kiu mi ricevis la ŝancon viziti ankaŭ aliajn lokojn, ligitajn kun la 2-a mondmilito, tiom forajn de la eŭropa militteatro, tiom forajn eĉ de la japanaj ĉefinsuloj mem. Mi elportas el ili ne nur nostalgion pri la paradiza naturo, sed lasas miajn emociojn de la plej profunda kompato por tiuj, kiuj firme kredis per sia vivofero savi la honoron de la propra hejmlando. Kaj la melodio kaj vortoj de “Ŝimauta” akompanas min kiel la pacdezira mesaĝo de tiuj, kiuj ne volas forgesi, kaj komprenas, ke – por mesaĝi pri paco kaj ĝin flegi – oni ne povas forgesi pri la historio.

ちの他にもいました。このような史跡と自然の美しさとのコントラストに再び私は驚きます。美しい自然を私はいつまでも記憶に留めようと努めます。木々の緑、さとうきび畑の緑、ほころびかける蕾、陽の光、日本の他の地域でも見かけるような方と、違う方。

私が綾部、亀岡の大本本部を訪ね、そのことから日本の歴史のこういう一面を知るようになったのは単なる偶然なのでしょうか？いいえ、今ははっきり判りませんが、いずれもっと深い意味が判るでしょう。

これまでに知っていた歴史的な事実を別の方向から見るようになりました。まるで反対の見方、私たちが自分で苦しんだかのような見方をするようになりました。

これらすべては2004年に起きました。私にとっては、ノルマンディに連合軍が上陸して60年目であり、ポーランドの子供やボーイスカウトが祖国解放のためドイツ軍の侵略に立ち向かい、若い命を捧げたワルシャワ蜂起から60年目です。

2004年は私にとっては別の年でもありました。第二次世界大戦に関わる他の場所を訪問する機会を得ました。欧州の戦場から遠く離れた土地であり、日本の本州からも遠い土地でした。その土地の天国のような自然に対して郷愁を抱くだけでなく、故国の名誉を守ると固く信じて命を捧げた方々への深い同情をその土地に残したのです。

そして「島唄」のメロディと歌詞が浮かびます。忘れたくないという人々の平和を望むメッセージとして、平和について話し、平和を守るために、歴史を忘れてはならないことを知る人のメッセージです。(訳：田中雅道)

Bongustaĉoj de Moldavio

Olga Gribovan

Mi ŝatus poiomete konatigi vin kun tiu ĉi fora de Japanio lando – Moldavio. Mi ja havas honoran taskon skribi pri mia lando por ke vi povu pli bone ekkoni ĝin, pliriĉigi viajn konojn pri la landoj de la mondo. Ĉi-foje, malgranda skizo pri naciaj tradiciaj manĝaĉoj kaj trinkaĉoj de suna Moldavio.

Moldava nacia kuirarto estas konata per siaj teneraj, pikantaj kaj aromaj manĝaĉoj. Ili estas plejparte prepareblaj el diversaj legomoj, grajnaroj, lakto, fiŝo kaj grasoj ktp.

Moldava riĉas per fekunda grundo, suna lumo kaj laboremaj homoj, pro tio manĝaĉoj preparita ĉi tie estas natura kaj ekologie pura. Manĝetaĉoj sur festa tablo diversas kaj bongustas – ekzemple, farĉitaj paprikoj kaj tomatoj, oleo el kokinaĉoj, viando aŭ fiŝo. Moldavaj barĉoj kaj supoj kun acida kvaso kaj verdaĉoj efektive stimulas apetiton kaj ĉiam bongustas. Ankaŭ konsilinda estas vilaĝa zamo (supo) kun kokinaĉoj kaj makaronioj, fiŝsupo kun rizo kaj aliaj. Terpomo, fazeolo, pizo, oberĝinoj, kukumoj kaj aliaj legomoj estas kuiritaj diversmaniere kaj aldoneblas al viandaĉoj. Ĉiu festotablo nepre surhavas golubcojn, preparitajn el folioj de vinberoj aŭ peklita brasiko kun rizo ene. Ili estas garnitaj per acidkremo aŭ vinagro. Ne eblas ne rakonti pri mamalygo, kuirita kaj servita kiel “ĉe patrino hejme” – kun brynza (ŝafa fromaĝo), acidkremo kaj ajla muelo (ajlo kun nuksoj kaj oleo). Priskribo de moldava tradicia kuirarto estus neplena se ni ne menciis bakaĉojn: placindoj, kuliĉoj, paskaj bakaĉoj, varenikoj ktp. Fruktoj kaj legomoj nepras sur ĉiu tablo. Tradicioj de najbaraj popoloj certe influis la moldavan kuirejon per florpa – pikanta supo kun viando de ŝafido ĉe gagauzoj, mandĝja – saŭco kun kokinaĉoj ĉe bulgaroj, pelmenoj (pastbuletoj kun viando) ĉe rusoj, galuskoj kun acidkremo ĉe ukrainoj. “Kiom da vinkeloj tiom da tradicioj” diras antikva moldava popoldiraĉoj. Al ĉiu manĝaĉoj kuiristo devas ankaŭ elserĉi trafan drink’ aŭ trinkaĉojn.

Moldavaj vinoj popularas en la mondo pro sia gusto, aromo kaj delikateco. Riĉegaj vinberaj ĝardenoj ebligas produktadon de tiom da variaĉoj de vino ekde blankaj ĝis ruĝkoloraj, ekde sekaj ĝis duondolĉaj kaj dolĉaj. Malnovaj vinoj el vinaj keloj allogas per siaj

monde konataj nomoj – Aligote, Shardone, Muscat, Pino, Kaberne kaj aliaj. Krome estas lokaj markoj ne malpli bonaj - Feteasca, Galbena kaj Moldova. Sed la plej bongustaj estas vinoj produktitaj ĉe vilaĝanoj, kiuj konservas tradicion fari vinon el jarcentoj kaj instruas tiun arton al siaj infanoj kaj nepoj. Se vi volas gustumi veran moldavan vinon, venu al iu vilaĝo, perdita inter holmoj de meza Moldavio, kie eĉ ne ekzistas stratoj, ĉar domoj staras laŭ hazarda ordo, kaj ĉiu lokano konas la alian. Alproksimiĝante rideman avon, kiu trankvile sidas apud sia domo, ĝuante sunan briladon, vi simple alparolu lin kaj li tuj invitos vin al “pahar de jin” – ĝlaso da vino. Jen estas momento de vero. Ne hezitu – ĝuu ĝin ĝisfine, ĉar tio estas produkto de amo, amo al grundo, amo al naturo kaj sia patrujo.

モルダビアのグルメ料理

オルガ・グリボヴァン（モルドバ）

日本から遠く離れたモルダビアの地について知っていただきたいと思えます。

私は自分の国のことを書いて、皆さんに知っていただき、世界の国についての知識を豊かにしていただけますことをとても光栄に存じます。今回は太陽がふりそそぐモルダビアの伝統的な食物と飲物について、小さなスケッチをお届けします。

モルダビアの郷土料理はマイルドですが、ピリッとして香り高い食物です。各種の野菜、穀物、牛乳、魚、脂肪等を調理します。モルダビアの肥沃な土地、太陽の光、勤勉な人々の力によって生み出されますから、調理される食物は自然で、清らかです。お祝いのテーブルに上る食物はバラエティ豊かで美味しいです。

例えばパプリカとトマトにひき肉を詰めたものや、肉や魚の煮凝りなどがあります。モルダビアのボルシチとスープは酸味のあるクワス酒と青菜が入っていて、食欲をそそり美味しいです。

他にお勧めしたいのは、鶏肉とマカロニが入った田舎風スープと、お米が入っている魚のスープです。じゃがいも、いんげん豆、えんどう、きゅうりなどの野菜をさまざまに調理して、肉料理に添えます。

お祝いの食卓には、ぶどうの葉から作ったゴルブチョコ、キャベツの漬け物でご飯を巻いたものが必ず出ます。それにはサワークリームかピネガーを添えます。

お母さんの家庭料理についてお話ししない訳には参りません。

羊のチーズと、サワークリームとにんにくにクルミとオイルを加えたものを添えます。プラチンドやクリチョイ、復活祭のケーキ、ヴァレニーコなどのパン、菓子類についても述べなければ、モルダビア伝統料理の記述として十分とは言えません。必ず食卓には果物と野菜が出ます。

シオルパというモルダビア料理には、お隣の国の影響が見られます。シオルパは子羊の肉のピリッとしたスープとガガウゾやマンドージャで、ブルガリアでは鶏肉を煮込んだソース、ロシアではベルメーノ（ギョウザに似たもの）、ウクライナではガルスコとサワークリームです。

「酒蔵の数だけ伝統がある」というモルダビアのことわざがあります。シェフは料理に合った飲物を選ばなければなりません。モルダビアのワインは、味と香りと繊細さで世界でも有名です。豊かなぶどう畑からは、白ワインから赤ワインまで、甘口から辛口まで、バラエティに富んだワインが産み出されます。ワインセラーにある年代物のワインは世界に知られた名で人を魅惑します - アリゴート、シャルドネ、マスカット、ピノ、カベルネなど。地元のワインにもひけをとらないラベルがあります - Fateasca、Galbena や Moldova です。でも、最高のワインは何世紀にわたって伝えられた醸造法で、村人によって造られたものです。その醸造法は子から孫へと受け継がれます。

本物のモルダビアのワインを味わいたい方は、中央モルダビアの丘にはさまれた村へお越し下さい。家が点在するだけで、そこには通りもありません。住民はお互いを良く知っています。家の側に微笑んで坐っているおじいさんが、ひなたぼっこしているところに近寄って話し掛けると、彼はすぐに pahar de jin 「ワインを一杯」と勧めるでしょう。それは本当の気持です。ご遠慮なく、呑み干して下さい。それは愛から産まれたものです、土地への愛、自然と祖国への愛です。（訳：田中雅道）

2006年4月号問題

初級

A . 次の文をエスペラントにきなさい。

- 1 . 彼は敵に服従しなかった。
- 2 . その父親は彼を許した。
- 3 . 規則により、王様は彼を罰した。
- 4 . 彼女は知識と経験に富んでいる。

B . 次の文を日本語にきなさい。

1. Mi sopiras je mia perdita feliĉo.
2. Li estas pli peza ol mi je dek kilogramoj.
3. Kia estas la koloro de la jako?
4. Kiajn kuiradajn vi plej ŝatas?

中級

A . 次の文を日本語に訳しなさい。

"Jes, jes, nur krablas kompreneble. La bufo nur krablas, knaboj, ĉar ĝi estas tiel ventra, tiel pufa, kun venena skvama haŭto, kiu eterne ŝlimas. Cetere ĝi estas danĝera, ĉar elkraĉas fajrolangon", li aldonis kuraĝigite de la mirplenaj esprimoj de la knabo. "jes, kaj venenas la akvon kontraŭ la bovoj".

B . 次の文をエスペラントに訳しなさい。

サンテミリオン。フランスのワインの中心地、ボルドーの主要産地のひとつである。その中心の町（といっても、人口三千数百の小さいところではあるが）と周辺のワイナリー、ブドウ畑まで含めて、世界遺産に登録されている。

八世紀に修行僧、エミリオンが隠遁生活を送るための洞窟を掘ったのが、この町の始まりだとか。そしてワイン作りはローマ時代までさかのぼるともいわれている。

サンテミリオン (Saint-Emilion) 、エミリオン (Emilion) 、ボルドー (Bordeaux)

2006年4月号の解答例

初級 A

1. Li ne obeis al la malamiko. (または Li ne obeis la malamikon.)
2. La patro pardonis al li. (または La patro pardonis lin.)
3. Laŭ la regulo la reĝo punis lin.
4. Ŝi estas riĉa je scio kaj sperto.

B

1. 私は失った幸福を惜んでいる。
2. 彼は私より十キログラム重い。
3. そのジャケットの色はどのような色ですか？
4. どのような料理をあなたはもっとも好みますか？

中級 A

「そうだ、そうだ、もちろん、ただ這いまわっているだけだよ。ヒキガエルは、ただ這いまわっているだけだよ、君たち。どうしてだって、ヒキガエルはあんなにお腹が出ていて、あんなに膨らんでいて、毒のあるゴツゴツした皮膚はいつもぬるぬるしているんだ。そのうえヒキガエルは危険なんだ。どうしてだって、炎の舌を吐き出すんだ。」彼は、少年の驚きでいっぱい表情につられて、さらに付け加えた。「そうだ、それから牛にとっては毒になるように水を変えてしまうんだ」と。

B

Saint-Emilion estas unu el la ĉefaj urboj produktantaj vinon de Bordeaux, kiu estas la centra loko de franca vino. La urbo centre, tamen ĝi havas nur trimil kelkcent popolanoj, malgranda urbo, kaj ĉirkaŭaj vinproduktejoj, kaj ankaŭ kampoj de vinberoj estas registritaj kiel unu el la heredaĵoj de la mondo.

Onidire, la urbo komenciĝis en la 8a jarcento, kiam la monaĥo Emilion fosis kavernon por vivi ermitan vivon. Kaj oni ekproduktis vinon jam en la epoko Romo.

解説

初級 A - 1、2 : 「～に従う」は obei al ~、または obei ~n で、どちらでもよろしいです。「～を許す」も同様で、pardonu al ~、または pardonu ~n です。

A - 4 : 「～に富んでいる」は, riĉa je ~といたします。

初級 B - 1、2 : 前置詞 je は、どの前置詞を使ってよいかわからないときに便宜上使ってよいものです。また、前置詞 je を省略して、目的格 (n) にすることもできます。Je は現在は、(1) 時刻など、(2) 長さ、高さ、重さなどについて「ほど、だけ、くらい」という意味に、(3) ある種の形容詞の補語(たえば、riĉa je scio kaj sperto のように) に、使用されます。B - 4 : 最上級をあらわす plej は、la plej bela fraŭlino 「一番きれいなお嬢さん」のように、la plej ~ とします。このように la が無い場合には、「もっとも、とても」の意味になります。ここは plej ŝatas と動詞を修飾していますので、la はつけません。

中級 B : 「サンテミリオン。フランスのワインの中心地、ボルドーの主要産地のひとつである」は、「サンテミリオンは、フランスのワインの中心地であるボルドーにおける主要産地のひとつである」という意味です。原文の意味を変えないで、訳しやすいような日本語に変えることも、一つの方法だと思えます。

「この町の始まりだとか」も、「この町の始まりだといわれています」ぐらいでいいでしょう。(碓 大福)

通信添削問題

2006年7月号の問題

初級

- A. 次の文をエスペラントにしてください。
1. それは何ですか。それはテーブルです。
 2. これはリンゴです。それは甘いです。
 3. そのスカートは青いです。
 4. この前君が買った、その本を持ってきましたか。
- B. 次の文を日本語にしてください。
1. Nenio estas en la kesto.
 2. Neniu krom li estis en la insulo.
 3. Li neniam diris veron.
 4. Neniom da dubo mi havis tiam.

中級

A. 次の文を日本語に訳してください。

Tiam; "Nu, knaboj, mi estas soifega, kaj devos iri al la hotelo por trinketo; ĉar estas tre strange: nur la biero povas satigi soifon tian, kian mi nun suferas. Tion mi trovis; tion mi trovis. Do, iru vi al la marbordo, ĉar mi ne volas, ke vi ludu apud la falĉilo. Jen Dol Rua kaj la aliaj iras al la bordo nun". Efektive, kvar el la vilaĝaj knaboj samaĝaj kiel Kol kaj Jano iris laŭ la vojo, kiu preteriris la parcelon malsupren al la marbordo, kaj jam mansvingis al la du urbeganoj, ke ili venu akompane. Do ĝisinte la onklon, la du kuzoj alkuris la grupon, kiu nun staris atendente.

B. 次の文をエスペラントに訳してください。

モノが保存や展示のために博物館・美術館に送られるのは仕方のない場合があるが、モノ本来の場所に残して見せてくれる方が望ましい。たとえば宗教美術の場合、保存や防犯のために美術館に移され、収蔵・修復されて展示されることが多いが、本来の場所である教会で見る方が生き生きと見える。美術館の方が照明も明るく、きちんとしたキャプションもあって他の展示品との関係から美術史的な位置づけもよくわかる一方、教会の祭壇に飾られている絵は薄暗くてよく見えず、キャプションも説明もないが、その場合の方が観者に雄弁に語りかけてくれるのは間違いない。

(『みんぱく』2006年6月号より)

宛先 〒621-8686 京都府亀岡市天恩郷
エスペラント普及会 誌上講座通信添削係
(返信用封筒に切手を貼ってお申込み下さい)



Tacuo Huĝimoto:<<Felietone Feritone>>

Eldono

Memoraĉ de la 54a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo, 10-11 junio en Amagasaki ĉe Eiĉi-Daigaku, estis broŝuro titolita: “Esperanto tiel parolata”; ties aŭtoro estas mi mem.

Kiel oni ekideis ĝin eldoni? Necesus komenci tion de antaŭhistorio. Jam de multaj jaroj “La Movado”, la komuna organo de kelkaj ligoj, estas presata de Tensei-ŝa, la presejo-eldonejo de Oomoto en Kameoka. Kaj ĉirkaŭ la 10a de ĉiu monato oni kutime duope venas al la presejo por la lasta kontrolo de la presprovaĉoj. Antaŭ jaroj, kiam bone fartis s-ro Takeuti Yosikazu, jam bedaŭrata, ankaŭ li venis por plenumi tiun taskon; multe pli antaŭe eĉ Miyamoto Masao plenumis la saman laboron. Do, unuvorte, la kunlabora rilato inter La Movado kaj Tensei-ŝa estas treege longa. Krom tio, Japana Esperanta Librokooperativo (Eldona Fakoj de KLEG) fojfoje presas ankaŭ librojn tie. En tiuj ĉi jaroj tiutasko okupitaj estas jam preskaŭ konstanta duopo, s-ino Tahira Masako kaj s-ro Mine Yositaka. Ili atingas la presejon ĉirkaŭ la 10a, diligente elserĉas tajp- aŭ kompost-erarojn. Kun tagmanĝa interrompo ili daŭrigas la strebadon ĝis preskaŭ la 5a horo. Ili foje suprenvenas al la tria etaĝo, kiam estas ankoraŭ iom da tempo ĝis la 5a, kiam mi forlasas la oficejon de la Internacia Fakoj (inkluzive de EPA).

Alifoj, ili atendas min malsuprenveni post la 5a. Ĉiuokaze, ni, triope paŝas pli ol 10 minutojn ĝis la stacidomo de JR Kameoka. Ni prenas la trajnon de 17a 29. Dum ni trajne babilas



藤本達生の『続きもので読みもので』

出版

尼崎の英知大学で6月10日、11日に開かれた第54回関西エスペラント大会の記念品は、『エスペラントはこうして話す』という仮綴じ本(厚表紙で製本していない本)であった。筆者は私自身である。

その出版はどのようにして思いつかれたのか。それは前史から始める必要があるのか。

もう何年も前から、いくつかの連盟の共同機関誌である La Movado 誌は、亀岡にある大本の印刷所であり出版社である天声社で印刷されている。毎月10日前後には校正刷の最終チェックのため、人がいつも二人づれで印刷所に来られる。

数年前、竹内義一さんがまだお元気のところは、その仕事をするために来ていられた。ずっと以前には宮本正男さんも同じ仕事をするために見えていた。つまり一言で言うと、La Movado と天声社の協力関係は非常に長い。そのほかにも、日本エスペラント図書刊行会 (KLEG の出版部) は、時々そこで本も印刷している。

近年、その仕事に携わっているのは、もうほとんど決まった顔ぶれの二人連れ、田平正子さんと峰 芳隆さんである。

お二人は10時ごろ印刷所に入り、入力ミスその他の間違いを必死で探し出す。昼食の中断のあと、さらにその努力を5時近くまで続ける。時には、5時までまだ時間があると、4階まで上がって来られる。5時というのは私が国際部 (EPA を含む) の事務所を出る時である。別の時には、お二人は私が5時過ぎに下りていくのを待ってられる。

いずれにせよ、私たちは三人連れでJR亀岡駅まで10分余り歩く。17時29分発の列車に乗る。車内でおしゃべりをしているうちに、



Tacuo Huĝimoto:<<Felietone Feritone>>

ni alvenas al la stacio Enmaĉi, kie mi kutime eliras de la trajno, sed nun eliras nur s-ino Tahira, dommastrino kaj socia aktivulo, kiu estas ĉiam okupita de io kaj tio. Do, trajne restas s-ro Mine kaj mi, kiuj veturas pluen ĝis la stacidomo de Kioto.

De antaŭ pli ol unu jaro ni kutimas okupi unu angulon de plaĉa lokalo en la stacia konstruaĵo, kiu estas cetere tre moderna kun grandega spaco en si. Ni mendas po unu glaso da aŭ blanka aŭ ruĝa vino plus unu porcio da sandviĉoj. Ĉiu el ni estas edzo kaj vespermanĝos hejme. Ĉi tie do ni sole konsolas la stomakon sandviĉe kaj ricevas bonhumoron per vino. Nia konversacio ĉiufoje iras de temo al temo, kaj ni mem ne scias, al kia konkludo ni venos. Ĉirkaŭ du horoj tiel pasas, kaj tiam estas ĉirkaŭ la 8a; estas tempo iri domen kaj ni ĝisrevidas.

En aŭtuno 2005, probable en septembro aŭ oktobro, ni parolis pri la interparola libro de s-ro Takeuti, kiu deziris plinovigi kaj plibonigi sian libron, sed jam lia malsano ne permesis al li tian laboron. Eble, tiaokaze, ni ekideis: do, kial ne eldoni tute novan libron pri interparolo?

La ĝistiamama multfoja konversacio inter ni pozitive efikis, tiel ke s-ro Mine, respondeculo pri eldono ĉe KLEG, verŝajne proponis la eldonplanon kaj la komitato de KLEG aprobis ĝin. Jam en oktobro eble, sed certe en novembro mi ekverkis la libron.

En la printempaj monatoj progresis, danke al la kunlaboro de pluraj personoj, praktikaj preparoj antaŭ la eldono kaj fine la libro eliris komence de junio.

円町駅に着く。私はいつもはここで降りるが、いまは田平さんだけである。主婦で社会活動をしている人はいつもあれやこれやと忙しい。

すると車内には峰さんと私が残し、さらに京都駅まで乗って行く。

1年以上も前から私たちは、大変モダンでその中に巨大な空間をもつ駅の建物の中にある気に入ったお店の片隅に陣どる習慣がある。私たちは、白または赤のグラスワインとサンドイッチを一人前注文する。二人とも結婚しているので夕食は家です。ここでは、だから単にサンドイッチで胃をなぐさめ、ワインでいい気分になるだけである。会話はその都度テーマからテーマに移り、どのような結論に達するのか、私たち自身にも分からない。

そうするうちに2時間ばかりが経過する。そのころは8時ぐらいになっている。帰宅の時間で、私たちは別れる。

2005年の秋、おそらくは9月か10月に、私たちは竹内さんの会話の本について話した。氏はそれを新しく改訂することを望んでいられたが、もはや病気がそのような仕事を許さなかった。

多分、そういう時に私たちは思いついたのである。だったら、まったく新しい会話の本を出すというのはどうかと。

それまでの何回もの私たちの会話が積極的に働き、KLEGの出版に関する責任者である峰さんが、この出版プランを提案し、KLEGの委員会が認めたのであろう。すでに10月か、11月には、私はその本を書き始めた。

春の何カ月かの間に、何人もの人たちのご協力のおかげで、出版前の実際的な準備がはかどり、そして終に本は6月の初めに出た。

『エスペラント日本語辞典』7月初旬発行予定

報告：JEI 事務局石野良夫 TEL 03-3203-4581 FAX 03-3203-4582
Email：esperanto@jei.or.jp

- ・普及版（B6判）本体価格 6,000 円
- ・机上版（B5判）本体価格 13,000 円として予約をとり、
予約数が 150 部を超えた時点で印刷する。
- ・普及版は 2006/12/31 までは本体価格 5,000 円の特別価格とする。
（書店販売は除く）

- - （基本情報） - - - - -
エスペラント日本語辞典 Esperanto-Japana Vortaro
編 者：(財)日本エスペラント学会エスペラント日本語辞典編集委員会
発 行 所：財団法人日本エスペラント学会
定 価：本体 6000 円 + 税 I S B N： 4-88887-044-6 C0587
判 型：B6
総ページ数：1352（付録などを含む）

- - （宣伝文句） - - - - -
エスペラントの「高度な学習辞典」として・・・

1. 見出し語総数: 43814（世界でも最大級）
 - ・見出し語は語根方式で配列。語根を主見出しに、合成語を副見出しに。主見出し語数: 17633、副見出し語数: 26181
2. 重要語彙にはていねいな説明
 - ・ランク A,B,C の計 2400 語に対して
 - ・特に動詞には自動詞・他動詞の区別のほかに、アスペクト情報（いわゆる点動詞・線動詞）や動詞型（いわゆる文型）を付す。
また、語義の理解を助ける基本義を表示
3. 豊富な用例と参照指示
 - ・用例は 38000 例以上を収録
 - ・類義語、関連する語などへの参照指示や、「類義比較」、「関連語」
コラムを随所に
4. 充実した付録
 - ・現代生活に必要な略語、ISO による国名・通貨名表記を併記した
国名・通貨名を収録
 - ・品詞、造語法、文の構成、句読法、数などの文法的な解説
 - ・日常のあいさつ

財団法人日本エスペラント学会

162-0042 東京都新宿区早稲田町 12-3 <http://www.jei.or.jp>

亀岡天声社売店でも取次販売をいたします。

Lasu al mi ion diri !

本年5月、大本インテルナツィーア(O I)から、機関誌「Oomoto Internacia (国際大本)」創刊号が発刊されました。

「Oomoto Internacia」誌は1年に複数回刊行予定で、O I と地元支援者をつなぐ会報になるほか、広くエスペラント界に向かっても、大本の教えと活動などを紹介するものです。

カラー24ページで、創刊号の表紙は地元の画家(エスペランチスト)が油絵で描いた「松と梅」、裏表紙は紅葉の美しい金竜海の写真。

本文は、エスペラントとポルトガル語の2言語で編集。「大本神諭」に始まり、廣瀬静水大本総長による創刊号に寄せての挨拶文、前田茂樹所長の挨拶文のほか、昨年12月15日のO I の1周年記念祭典(兼ねて、教主様、ザメンホフ博士のご生誕日祝い)の様子や、ベネジット・シルバ先生による講演要旨(開祖様、聖師様のみ教えなど)、O I 開設に尽力いただいたウルスラ・グラタパリアさん(孤児院施設運営)やラモス・ドリーニ氏(ブラジル・エスペラント連盟理事)、エウリペデス・バルポーサ氏(エスペランチスト、元ブラジル連邦警察事務総長)の寄稿文、など。

この「Oomoto Internacia (国際大本)」という書名は、大本の海外宣教史上、重要な機関誌と同名です。

出口王仁三郎聖師はモンゴルから帰国した翌年(大正14年・1925年)の6月11日、西村光月宣伝使を欧州に派遣。西村宣伝使は世界エスペラント大会(スイス)に参加したあと、フランス・パリを拠点(欧州本部)として宣教を開始しました。

その西村宣伝使によって大正15年(1926年)1月、当時のパリから発行された全文エスペラントの機関誌が「Oomoto Internacia」でした。

同誌により、欧州はもとより広く全世界に大本の教えが伝えられ、海外における大本発展に大きく貢献しました。

本年は、そのパリでの創刊からちょうど80周年にあたります。

このたびは南米の国際都市ブラジリアにおいて、同名の機関誌が創刊されることになり、有り難く思うとともに、今後の発展を期待しています。

H・S

EPA 事務局便り

EPA 講師一覧 (あいうえお順)

1	吾郷 孝志	29	高瀬 順亮
2	井頭 ますみ	30	高野 春樹
3	江川 治邦	31	竹原 如是
4	伊藤 欽介	32	田中 雅道
5	大久保 良	33	田平 正子
6	大和田 さち	34	田淵 八洲雄
7	奥原 能	35	出口 京太郎
8	奥脇 俊臣	36	長井 順一
9	鬼塚 義彰	37	長井 小文
10	加賀見 明男	38	中野渡 光昭
11	筧 邦麿	39	中原 榮子
12	鹿子木 旦夫	40	中村 勲
13	Charles Rowe	41	西永 篤史
14	川地 善則	42	西野 祥隆
15	川村 泰範	43	碓 大福
16	木野 榮二	44	平井 淳
17	木村 且哉	45	平岡 康
18	後藤 純子	46	平野 清享
19	小林 正幸	47	藤代 和成
20	小藪 資史	48	藤本 達生
21	斉藤 延	49	前田 茂樹
22	斉藤 泰	50	松永 梅男
23	坂下 正昭	51	松本 公夫
24	坂本 弓代	52	村田 孝子
25	塩崎 温美	53	森下 峯子
26	塩谷 誠	54	矢野 裕巳
27	Joel Brozovsky	55	山本 鳩江
28	曾田 美喜子	56	Rikardo Newsum

講師の方で上の一覧表に掲載されていない方は、お手数ですが、EPA 事務局までご連絡下さい。

FAX: 0771-25-0061 e-mail: officejo@epa.jp

亀岡天恩郷・郷内講座のご案内

月曜日 木村且哉 rudimenta
(Kacuja KIMURA)
入門・初級クラス



火曜日 小藪資史 rudimenta
(Motofumi KOJABU)
入門・初級クラス



水曜日 松本公夫 rudimenta
(Kimio MACUMOTO)
入門・初級クラス



水曜日 川地善則 komencanta
(Jošinori KAŬĀĈI)
初級クラス



木曜日 平岡 康 rudimenta
(Jakkun HIRAOKA)
入門・初級クラス



木曜日 鬼塚義彰 rudimenta
(Jošiaki ONICUKA)
入門・初級クラス



金曜日 奥脇俊臣 paroliga
(Tošiomi OKUŬAKI)
初級クラス



金曜日 西永篤史 paroliga
(Acuši NIŜINAGA)
会話クラス



金曜日 大和田さち rudimenta
(Sači OOŬADA)
入門・初級クラス



2006年1月より亀岡天恩郷の郷内講座は、参加費はそのまま月曜～金曜日までのどのクラスでも「いつでも何回でも受講し放題！」となりました。

遠近各地からのご参加を講師一同、心からお待ちしております。

(受講ご希望の方は事務局まで)



Lasu al mi ion diri !

読者の皆様からの声を募集しています!

近況報告、提案、呼び掛け、面白いニュース、本誌への要望、写真等、なんでもけっこうですので、どしどし事務局までお送り下さい。実名、匿名、リングネーム、なんでもo.k.です!

EPA 事務局便り

新事務局長に吾郷孝志 EPA 常務理事が就任



大本本部の人事異動に伴い、2006年5月31日に開催された EPA 常務理事会にて、鹿子木理事長より、吾郷孝志常務理事（写真左）をエスペラント普及会事務局長に推薦する旨の提案があり、全会一致で承認されました。

吾郷新事務局長はエスペラント普及会業務全般を担当し、N.V. 誌の編集長に就任いたします。

これに伴い、矢野裕巳 EPA 事務局長、木村且哉 N.V. 誌編集長は退任いたします。

「熊本エスペラント会」が地元紙で紹介されました

「熊本エスペラント会（木野榮二 EPA 代議員が事務局長）」が、2006年6月12日付の熊本日日新聞朝刊のコラム欄に取り上げられました。

1906年6月12日に日本エスペラント協会が創立されてから今年が100周年ということで、地元紙が、創設84年目の熊本エスペラント会を紹介。「九州の中心地でしたから発足も早かったのでしょうか。世界中の人とじかに話し合えるのが楽しみ。」との木野氏のコメントが掲載されています。

藤本達生著 『エスペラントはこうして話す』

第54回関西エスペラント大会記念品として、藤本達生氏著『エスペラントはこうして話す エスペラント会話の実際』が発行されました。

藤本氏の半世紀以上にわたるエスペランティストとしてのエッセンスがふんだんに詰め込まれた必読の書です。

関西大会当日は、開会式にて藤本氏がKLEG奨学金受賞者として表彰され、御礼また今後の著作活動への奨励として賞金が手渡されました。

また、サイン会も開催され多くのエスペランティストで賑わいました。ぜひ、皆さまも、お手元におかれることをお勧めします！

『エスペラントはこうして話す』

発行：日本エスペラント図書刊行会

発売：財団法人 日本エスペラント学会

定価：1000円＋税

ISBN4-88887-043-8 C1087 ¥1000E

亀岡天声社売店にて販売しています。